

青森県立

美術館

コレクション展

AOMORI MUSEUM

OF ART

COLLECTION

2020 - 2

※所蔵先の記載が無い作品はすべて青森県立美術館所蔵です。

※作品サイズの単位はcmで、原則として縦×横（立体は、高さ×横×奥行）の順序で表記しています。

※出品作品は都合により変更される場合があります。

通年展示

アレコホール

マルク・シャガール Marc CHAGALL

1	バレエ「アレコ」の背景画	1942年	テンペラ・綿布		
	第1幕 月光のアレコとゼンフィラ			887.8×1472.5	
	第2幕 カーニヴァル			883.5×1452.0	
	第3幕 ある夏の午後の麦畑			914.4×1524.0	*1
	第4幕 サンクトペテルブルクの幻想			891.5×1472.5	

F. G

奈良美智 NARA Yoshitomo

1	アオモリ・ヒュッテ 1	2016年			*2
2	Three Sisters Billboard / Aomori Version	2006年	アクリル絵具・紙、板	137.8×257.4	*3
3	Dog is Man's Best Friend!	1985年	アクリル絵具、鉛筆・紙、板	62.8×91.0	
4	まぼろしの犬のピラミッド	1991年	アクリル絵具・キャンバス	65.3×65.3	
5	Flap Eared Creeping Dog	1994年	アクリル絵具・キャンバス	62.0×64.0	
6	10 Feet Angry Pup	1994年	ミクストメディア	18.0×25.0×80.0	
7	1, 2, 3, 4! It's everything! / Aomori Version	2008年	アクリル絵具・板	267.9×252.2	*3
8	Puff Marshie	2006年	FRP、ウレタン塗装	H150.0×φ300.0	*3
9	(杉戸洋との共作) Crystal Ball	2004年	アクリル絵具・キャンバス	130.0×115.0	*3
10	(杉戸洋との共作) Outrun	2004年	アクリル絵具・キャンバス	80.0×60.0	*3
11	(杉戸洋との共作) R for Rainbow	2004年	アクリル絵具・キャンバス	27.5×23.0	*3
12	「トビウ・キッズ」シリーズより 《シウ》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	*3
13	「トビウ・キッズ」シリーズより 《ユノア》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	*3
14	「トビウ・キッズ」シリーズより 《コウ》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	*3
15	「トビウ・キッズ」シリーズより 《ココネ》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	*3
16	「トビウ・キッズ」シリーズより 《レノア》	2017年	木炭・紙	182.0×91.0	*3
17	アオモリ・ヒュッテ 2	2016年			*2
18	Broken Heart Bench / Aomori Version	2008年	アクリル絵具・板	180.0×161.5	*3
19	E. P. Girl	1997年	FRPに彩色	35.7×30.5×19.0	

20	飛生	2017年	アクリル絵具、色鉛筆・紙	16.8×20.0×7.0	*3
21	アファンルバル	2018年	アクリル絵具、色鉛筆・段ボール紙	29.7×21.0	*3
22	木の子	2018年	鉛筆・紙	42.0×29.7	*3
23	学校	2018年	鉛筆・紙	29.7×42.0	*3
24	ギボウシ	2018年	鉛筆・紙	29.7×42.0	*3
25	アファンルバル・二つの顔	2018年	鉛筆・紙	29.7×42.0	*3
26	鹿	2018年	鉛筆・紙	29.7×42.0	*3
27	横顔	2018年	鉛筆・紙	21.0×29.7	*3
28	予感	2018年	鉛筆・紙	21.0×29.7	*3
29	Untitled	2008年	アクリル絵具・板	58.5×109.0	*3
30	Tobiu 2017	2017-20年	ブロンズ	37.0×27.0×25.5	*3
31	HULA HULA GARDEN	1994年	ミクストメディア	可変	

※今回の構成による F,G の展示は、コレクション展 2020-1 (3/20-7/12)、2020-2 (7/18-9/6) と 2 期にわたって続きます。

屋外展示

奈良美智 NARA Yoshitomo

1	あおもり犬	2005年	鉄筋コンクリート、GRCモルタル、フッ素樹脂塗装	850.0×670.0×900.0	
2	Miss Forest / 森の子	2016年	ブロンズ、ウレタン塗装	635.0×227.0×227.0	*4

*1 フィラデルフィア美術館蔵 ※展示期間：2017年4月25日-2021年3月頃（予定）

*2 「アオモリ・ヒュッテ」は、この展示室に「ニュー・ソウルハウス」として、2006年から2015年まで設置されていた小屋の作品を、2016年3月に改築したものです。

*3 作家蔵(青森県立美術館寄託)

*4 美術館南側(カフェ、ショップ側)の屋外敷地に位置する奈良美智のデザインに基づいた小さな八角形の建物[八角堂]の中に展示しています。

青森県立美術館コレクション展 2020-2：この世界と私のあいだ

会期：2020年7月18日（土）－ 9月6日（日）

2020年度の常設展第2弾。今回は「あいだ（境界）」をつなぐ芸術の力に着目してコレクション作品を展示します。そうして制作の可能性を広げ、人が生きるべき世界との距離の再設定を試みます。

「あいだ」とは何でしょうか。ここでは複数の事物をつなぐ「境界」として考えてみます。事物の最小単位である点は、点と結ばれることで線となり、線は交わることで空間を生成する。ならば世界とは「あいだ(境界)」そのもの。そこで芸術は様々な「あいだ」に散在する事物の偏差から「かたち」を拘う術として機能してきました。古く戦地に赴く恋人の影の輪郭をなぞって以来、遠近法や色彩分割といった芸術技法の全ては「あいだ」に分け入ることで世界と向きあう（すなわち距離をつかむ）ための芸術家なりの実践と言えるのです。

本コレクション展は、そんな芸術家の仕事を、現実をはかり・組みかえ・交わせ、まだ見ぬ世界と様々な関係しようとするアートとして広義に読みかえ、そうしたアートを5章に分けて紹介するものです。「1. 精神と物質のあいだで」では、齋藤義重と高松次郎の60年代の作品を中心に紹介します。制作における思考と物質の展開可能性を追求し、空間全体で作品を機能させる「インスタレーション」の初期の担い手である齋藤と高松。両者の作品の相似／相違をもとに、思考と物質とが連続して働く展示空間は、世界との距離にまつわる本展の導入にふさわしいはずです。「2. 『版画』と『絵画』」では、棟方志功独自の「版画」「絵画」へのアプローチをヒントに、技法が芸術家の個性形成に果たした役割を探ります。ここでは「てぎわる」ことをとおして、人が世界との距離をつかむための具体的実践が示されることとなります。「3. わたしをつくるもの」では、青森の子どもたちが集団で制作した版画作品、画家の大小島真木が美術館での米作り体験をもとに県民と共同で制作した巨大絵画作品、ケーテ・コルヴィッツが戯曲『織工たち』をモチーフに制作した版画連作を取り上げます。これらの作品に通底する社会や自然、時代との間で他者との同化／異化を繰り返し、生きるべき自己をつかもうとする作り手の姿は、不和と断絶にまみれたこの世界の希望といえます。「4. (芸術空間における) S.F.X の可能性」では、彫刻家で特撮美術監督の成田亨のウルトラ怪獣原画やS.F.X（特殊撮影）用の舞台セットなどを紹介し、同時代の齋藤や高松とは別角度から、世界を拡張させて捉える手法の広がりについて考えます。「5. 歩くことから始まる」では、リチャード・ロングの白山山地での8日間の単独歩行から制作された写真とテキストによる作品、平田五郎のアラスカへの旅行体験を軸に現地での彫刻制作、神話リサーチなどから構成される作品を紹介します。ともに土地へのかそげき身体的介入をもとに世界を想像しなおそうとする芸術家の作品を見比べることは、人が芸術家であるなしに関わらず、自らのうちに自己や世界と向き合うための態度を養うことにつながります。

“私にとって、制作するというプロセスがあって、プロセスとしてやった結果として作品はある。大切なのは「もの」ではなく「こと」。結果としての作品をつくらうとしているのでなくて、プロセスが伝わればいいと思っています。”(*1)

“（事件が起こったときではなく、事件と事件の）あいだに何をするか。本当に重要なのはそれだけ”(*2)

紙幅はとうに尽きています。最後に齋藤義重と、現在進行形の人権運動「Black Lives Matter」を伝える記事中に引用されたジャーナリストのネスリン・マリクの言葉を紹介して、文章を終えることにします(*3)。この世界とのあいだでどんな「わたし」を生きるべきか。今、何が始まって終わろうとしているのか。それを考え、「常にクリエートし続けるプロセス」(*4)が世界の明日をつくると信じること。芸術であろうとなかろうと。それが良かろうと悪かろうと。

奥脇嵩大（青森県立美術館学芸員）

*1 齋藤義重展実行委員会編『齋藤義重展』（2003）p.9

*2 Siana Bangura (Ai Nakayama 訳)「Black Lives Matter を本気で考えよう」『VICE』（2020年6月18日閲覧）
https://www.vice.com/jp/article/ep4x9n/black-lives-matter-what-next

*3 本展の名称英訳が黒人を取りまく現実からアメリカ社会の矛盾を描くタナハン・コーツ (Ta-Nehisi Coates) の小説『BETWEEN THE WORLD AND ME（邦題：世界と僕のあいだに）』（2015）と同一なのは偶然である。

*4 ハンス・U・オプリスト（村上華子訳）「ヨハネス・クラダース」『キュレーション』（フィルムアート社／2013）p.83-84

△

1. 精神と物質のあいだで：齋藤義重、高松次郎

	Between mind and matter: SAITO Yoshishige, TAKAMATSU Jiro			
1	齋藤義重 《あほんだらめ》	1948年	油彩・キャンバス	60.5×72.7
2	齋藤義重 《青の構成》	1961年	油彩・合板	181.5×121.0
3	齋藤義重 《チェーン》	1967年(修復：2003年)	ラッカー・合板	250.0×270.0
4	齋藤義重 《反対称 対角線》	1976年	木、プラスチック、紙	64.5×53.8
5	齋藤義重 《複合体301》	1986年	ラッカー、木・ポルト	295.0×830.0×460.0
6	齋藤義重 《ネガティブ》	1992年	ラッカー、木(合板他)・ポルト、ローブ	300.0×430.0×155.0
7	高松次郎 《点 no.11》	1961－62年	ラッカー・板	40.9×31.6
8	高松次郎 《影》	1968年	ラッカー、金具・板	65.0×54.0×9.8

▽

2. 「版画」と「絵画」：棟方志功

	Munakata's Difference between "Prints" and "Paintings or Drawings": MUNAKATA Shiko			
1	<small>ぼんだらめ</small> 萬朶譜	1935年	木版・墨・紙	各42.9×39.6 *5
2	<small>しょうまんふとう</small> 勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅	1938年	木版・墨・紙	各24.0×28.0
3	<small>うんめいしょう</small> 運命頌	1951年	木版・墨・紙	各87.5×88.5 *5
4	<small>そうげん まく</small> 蒼原の柵	1956年	木版・墨・紙	77.0×112.5 *5
5	<small>おんさんぞんどうず</small> 御三尊像図	1950年	彩色・板	(左)167.0×88.0、 (中)166.6×87.3、 (右)166.6×93.6
6	<small>こけしず</small> 胡慶志図	1972年	倭画、彩色・紙	40.5×22.5 *5
7	<small>ざっけさいざいず</small> 雑華彩々図	不明	倭画、彩色・紙	34.5×51.5 *5
8	<small>あおもり</small> 青森ねぶた図	1960年	倭画、彩色・紙	63.0×69.0 *5
9	<small>はっこうださん</small> 八甲田山	1943年	油絵・キャンバス	45.5×52.5 *5
10	<small>おいらせ けい</small> 奥入瀬・溪「阿修羅」	1938年	油絵・キャンバス	37.5×45.2 *5
11	<small>おんきよめいけんじゆず</small> 御巨銘薫樹図	1952年	倭画、彩色・紙	各129.0×62.3

*5 棟方志功記念館蔵

C

3. わたしをつくるもの：青森の教育版画、

大小島真木 + アグロス・アートプロジェクト、ケーテ・コルヴィッツ

What makes me: Children's prints in AOMORI, OHKOJIMA Maki + Agros Art Project, Kathe KOLLWITZ

1	上北郡六戸町立昭陽小学校 《黒土が消えるとき》 6年生（指導：中嶋崇）	1978年	木版、インク・紙/12点から抜粋	*6 各61.0×92.0
2	大小島真木 + アグロス・アートプロジェクト 《明日の収穫》	2017-18年	アクリル絵の具、米絵の具、藍染料、糸、綿布・帆布	*3 9860.0×4650.0
3	ケーテ・コルヴィッツ 《織工の蜂起》	1893-97年		6点組
	1.困窮	リトグラフ・紙		15.4×15.1
	2.死	リトグラフ・紙		22.4×18.6
	3.協議	リトグラフ・紙		27.5×16.9
	4.織工の行進	銅版・紙		20.7×28.3
	5.襲撃	銅版・紙		22.3×28.2
	6.終わり	銅版・紙		23.9×29.8

*6 五所川原市教育委員会蔵（青森県立美術館寄託）

映像室

4.(芸術空間における) S.F.Xの可能性：成田亨

Possibility of the special effects: NARITA Tohl

1	麻雀放浪記 廃墟の上野セット（復元）	1984/2014年	ミクストメディア	360.0×540.0
2	麻雀放浪記 廃墟の上野セットデザイン	1984年	鉛筆、水彩・紙、写真	73.5×53.2
3	この子を残して 原爆投下1	1983年	鉛筆、水彩・紙	38.8×73.4
4	この子を残して 原爆投下2	1983年	鉛筆、水彩・紙	37.8×72.8
5	この子を残して 原爆投下3	1983年	鉛筆、水彩・紙	38.9×73.3
6	ガヴァドン初稿	1966年	ペン、水彩・紙	27.5×39.7
7	ガヴァドン幼獣	1966年	ペン、水彩・紙	27.1×37.9
8	ケムール人	1965年	水彩・紙	34.7×25.1
9	シャドー星人イラスト	1968年	ペン、水彩・紙	38.0×27.0
10	ダダ	1967年	ペン、水彩・紙	39.8×27.2
11	バルタン星人決定稿	1966年	ペン、水彩・紙	36.4×25.8
12	ブルトン	1966年	鉛筆、水彩・紙	24.2×31.0
13	ブルトン	1966年	ペン、水彩・紙	27.5×36.6
14	ポール星人	1968年	鉛筆・紙	39.4×36.4

D

5. 歩くことから始まる：リチャード・ロング、平田五郎

Start from walking: Richard LONG, HIRATA Goro

1	リチャード・ロング 《フォトワーク「白神山地歩行シリーズ」5点セット》	1997年		写真、テキスト
	キャンプ地の石	111.8×81.4	白神の線	81.4×111.8
	ある青い森の歩行	81.4×111.8	初夏の円環	81.4×111.8
	白神の円環	81.4×111.8		
2	平田五郎 《Inside Passage -月を盗んだワタリガラス》	2005, 07年		写真(13点)、テキスト *3 各102.0×122.0×7.5

E

みんなで楽しむ美術館 - 扉を開ける、光を入れる

Museum for All *Open the door, Turn on the light*

1	オディロン・ルドン 《光の横顔》	1886年	リトグラフ・紙	34.2×24.2
2	オディロン・ルドン 《ベアトリーチェ》	1897年	カラーリトグラフ・紙	33.6×29.5

世界規模で拡大する新型コロナウイルス感染予防のため、今年4月11日から5月21日にかけて休館していた青森県立美術館。再開館に伴い、今まで以上に全ての人々が楽しみながら作品や美術館にふれることを目指した特別プログラム「みんなで楽しむ美術館」を展開します。テーマは、「扉を開ける、光を入れる」。会場の随所に知識によらない鑑賞のヒントとなる言葉が展開されるとともに、本プログラムの冒頭ではオディロン・ルドンによる二つの作品を紹介します。黒と色彩、それぞれ異なる色と光への志向に感覚をひらいた後は、本展設営の様子を紹介する動画展示と、複数の光の組み合わせをもとに色の成り立ちを楽しみながら学ぶ体験展示が展開されます。作品がもたらす光と色の体験を身体的な体験に連結させ、美術館での鑑賞体験をさらに拡張することを試みます。

関連企画

1. レクチャー「距離にまつわる制作論」

外部講師によるレクチャーを美術館 youtube チャンネル上で公開します。

公開日時：8月 予定

講師：上妻世海（文筆家/キュレーター）

2. 担当学芸員によるギャラリートーク

今回の展示解説を美術館 youtube チャンネル上で公開します。

公開日時：8月 予定

講師：奥脇嵩大（青森県立美術館学芸員）

展示室マップ

